

聖書：ヨハネの黙示録 13：1～10

説教題：聖徒たちの忍耐と信仰

日時：2021年5月16日（朝拝）

前回、地に投げ落とされた竜である悪魔は激しく怒り、女すなわち教会を攻撃することに向かったという幻を見ました。竜は初め口から大水を川のように吐き出して彼女を押し流そうとしましたが、すなわち偽りの教えをたくさん送り出して教会をひっくり返し滅ぼそうと図りましたが、うまく行きませんでした。そこでさらなる戦いを仕掛けようとして出て行ったこと、そして海辺の砂の上に立ったというところまで読みました。その悪魔である竜が呼び寄せたことによってでしょう。13章1節で海から一頭の獣が上って来ます。この獣を手下として用いて竜が次の働きを進めたことが今日の箇所にあります。

果たしてこの獣とは何のことでしょうか。この後を読むと、この獣は大言壮語し冒瀆のことばを語ること、人々を従わせ自分を拝ませること、また神と神の民を冒瀆し教会を迫害することが書いてあります。その正体を読み解く手掛かりとなるのは1～2節にある獣の描写です。初めてここを読む人はただただ混乱しそうになりますが、旧約聖書を一通り読んだことのある人ならすぐ思い起こすのは、これはダニエル書7章に出てくる獣と良く似ているということです。ダニエル書7章3～8節にはダニエルが幻の中で見た4頭の大きな獣が出て来ます。その第一の獣は獅子のようで、第二は熊のよう、第三は豹のよう、第四は10本の角を持つさらに恐ろしいものでした。これらはダニエル書では、歴史において次々に現れる神と神の民に敵対して立つこの世の国々・王国を指します。具体的にその4つの獣はバビロン、ペルシャ、ギリシャ、ローマを指すと一般的に考えられています。この幻をもとにして今日の幻が示されていることを考慮するなら、黙示録13章の獣も神と神の民に敵対して立つこの世の王国や政治的支配者たちを指すであろうと考えられます。

では当時においてこれは具体的に何を指すのでしょうか。ヨハネの黙示録が書かれた当時、世界の支配者はローマで、その王は第11代皇帝のドミティアヌスでした。彼はキリスト教会を迫害した暴君で、彼の支配下にあつてヨハネはパトモス島に島流しにされ、アジアの教会には殉教者が始まっていました。とするとこの獣とはドミティアヌスのことなのでしょうか、あるいはさらに広くとってローマ帝国のことなのでしょう。

ようか。確かに当時においてはそうでしょう。しかし5節にこの獣は「42か月の間、活動する権威が与えられた」とあります。この42か月とは、この書に繰り返し出てくる3年半あるいは1260日と同じ期間で、それはヨハネがいた1世紀からキリストの再臨の日までの全期間を指すことをこれまでも述べて来ました。ですからこの獣は当時のローマ帝国も含みますが、それだけではないということになります。これは世の終わりまで繰り返し現れるものについて言っていることになります。

ここである人は思うかもしれません。聖書の他の箇所では国家的為政者や統治者は良いものとして見られているのではなかったかと。たとえばローマ書13章にある通り、それは神が立てられたものであり、私たちは敬意と祈りをもってこれに従うようにと勧められていたのではなかったかと。確かにそうです。これは人間の知恵に由来する制度ではなく、神の御心によるものです。人間の罪が暴走し、拡大しないため、その抑制のため、そして社会の秩序と平和の維持のため、一般恩恵として神が立てておられる制度です。しかしその本来は良いものを悪魔は悪く用いるということです。悪魔は神と違って新しく何かを創造することはできません。悪魔がすることは、すでにある良いものを捻じ曲げて使うことです。ですから神が良いことのために用いられるようにと定めた政治的権力を悪魔は自分の悪い計画を実行するための手段として用いるということがここに言われているわけです。それを自分の手下にしてしまうと。

この獣は1節にある通り、10本の角と7つの頭を持っていました。これは前の12章3節に記されたサタンの姿、大きな赤い竜の姿と同じです。それを映し出すようなものです。しかし違いもあります。竜の場合は7つの頭に7つの王冠がありましたが、獣の王冠は10本の角の上にあります。角は力の象徴で、サタンは王たちの武力を用いて働くということでしょうか。またそれぞれの頭には神を冒瀆する様々な名がありました。これは自らを神と等しくする尊大さを示しています。

そしてその姿は恐ろしいものでした。2節の描写はダニエル書7章を思い起こさせると先に述べましたが、大きな違いはダニエル書では4頭の獣だったのに対して、こちらはそれらを組み合わせたとような一頭の獣であることです。これはこちらの方がより強大で恐ろしい存在であることを暗示します。そして竜すなわちサタンがこの獣に自分の力と王座と大きな権威を与えました。

さて3節に「その頭のうちの一つは打たれて死んだと思われたが、その致命的な傷は治った」とありますが、これは何のことでしょうか。原文を読むと分かることは、ここで「打たれて」と訳されている言葉は、子羊キリストについて「屠られた」と言われている時の言葉と同じであることです。つまりこの獣もキリストのように屠られ、死に、そして復活した。まるでイエス様を思い起こさせるようなことがここに言われています。サタンはイエス様の十字架と復活によって決定的に敗北したのですが、するとサタンは自分の手下として用いる獣をまるでそのイエス様を模倣するかのようになり、そのパロディとして導いたと言われているわけです。これは具体的に何のことなのでしょう。ある人はこれは皇帝ネロの死によってローマ帝国が一旦死んだような状態になったことを指すと見ます。ネロはキリスト教会を迫害した皇帝として有名ですが、紀元68年に自殺します。その後3代はみな短命で終わります。それぞれ暗殺、自殺、戦死によってその代を終えます。しかしその後のウェスパシアヌスの時代になって安定し、その後、その子のティトスとドミティアヌスが順に引き継ぎました。こうして一旦死んだように思われたローマ帝国が復活した様を指すと見ます。また他の人は14節でこの獣が「剣の傷」を受けて死の状態になったと言われていることに注目し、黙示録で剣はキリストのものとして出て来るので、この獣の死は前回見たキリストのサタンへの決定的勝利を指すと見ます。そのような大打撃を受けながら、サタンはその後、ネロやドミティアヌスを通してキリスト教会への迫害に乗り出している。それがまるで息を吹き返したかのような姿として描写されていると。確定的なことを言うのは難しいようです。いずれにせよ、この獣は勢いづき、当時で言えばローマ帝国は力を増し、人々はその獣に従うようになった。すなわち国家権力に特別な忠誠を違うようになった。そして実際には竜すなわちサタンを拝んだとこの幻は告げているわけです。また人々は獣をも拝んでこう言ったと4節後半にあります。「だれがこの獣に比べられるだろうか。だれがこれと戦うことができるだろうか。」これは本来神にこそふさわしい言葉です。出エジプト記15章11節：「主よ、神々のうちに、だれかあなたのような方がいるでしょうか。だれかあなたのように、聖であって輝き、たたえられつつ恐れられ、奇しいわざを行う方がいるでしょうか。」ミカ書7章18節：「あなたのような神が、ほかにあるでしょうか。」このような神にこそふさわしい称賛を、獣、すなわち悪魔が用いるこの世の政治権力は自らのものとして奪い取ろうとする。

この獣と化したこの世の政府・為政者のすることが5~7節に大きく2つ書かれて

います。一つは冒瀆です。自分こそ大能者、全権者として誇り高ぶり、自らを神の位置に押し上げる。当時のドミティアヌスは自らを「主にして神」と人々に呼ばせ、皇帝礼拝をさせました。そしてこれに従わない者たちに対しては冒瀆のことは語りません。6 節に神と神の民を冒瀆したとあります。もう一つのことは、ただ口で冒瀆するだけでなく、7 節にある通り、聖徒たちに戦いを挑んで打ち勝つということです。すなわち具体的な迫害、力の行使です。それはあらゆる地域、世界の隅々にまで及ぶことが7 節後半に記されています。

果たしてこのような中で神の民はどのように歩むべきか、どんな確信と希望を持って歩めば良いのか、最後に残りの部分から4つのことを心に留めたいと思います。まず一つ目は「神の主権」です。今日の箇所を読むと思わず竜と獣の活動に圧倒されてしまいそうです。しかしよく読むと、獣が主権を持っているのではないことが随所に示されています。5 節に「この獣には、大言壮語して冒瀆のことは語る口が与えられ」とあり、その後にも「四十二か月の間、活動する権威が与えられた」とあります。誰が与えたのでしょうか。前の4 節からの流れを考慮すると、それは竜だと読めるかもしれません。そしてそれが正しいかもしれません。しかしその期間は「42 か月の間」とあります。悪魔はこんな限界は定めてほしくありません。こんな制限は取り払ってもらいたいと思っている。とするとここでより大きな権威を持っているのは神であるということになります。また7 節に「獣は、聖徒たちに戦いを挑んで打ち勝つことが許された」とありますが、誰が許したのでしょうか。これは明らかに神です。同じ7 節後半の「また、あらゆる部族、民族、言語、国民を支配する権威が与えられた」とあるのも、与えたのは神でしょう。つまりサタンが獣を用いてしたい放題のことをし、教会の迫害に成功したとしても、それを許しておられるのは神である。神がご自身の奇しいご計画をもって、何と竜と獣の活動さえも用いているという驚くべきことが言われています。このメッセージを見失ってはなりません。

2 つ目に8 節で、このような国家権力の迫害のもとで獣を拝むのは「世界の基が据えられたときから、屠られた子羊のいのちの書にその名が書き記されていない者はみな」と言われています。反対から言えば、いのちの書にその名が記されている真の神の民は決して獣を拝まない。ここに私たちの信仰は私たちから始まっているのではなく、永遠の昔からの神の一方的な恵みと選びによることが言われています。その神の守りの下にある者たちはどんな迫害が起こっても決して偽りの獣を拝まない。そうし

ないように上からの力で守られている。果たして私たちはどっちでしょうか。いのちの書に名が記されている者でしょうか。そのことは私たちが獣を拝むか拝まないかに現れると言われています。拝むのはその名が書き記されていない人だけなのです。

9 節の「耳のある者は聞きなさい」という注意喚起の言葉をはきんで、3 つ目に心に留めるべきは 10 節前半です。8 節で見たように、神の民には上からの奇しい守りがあります。しかしそのことは私たちの地上のいのちが必ず守られることは意味しません。簡単に言えば殉教はあり得ます。10 節前半に「捕らわれの身になるべき者は捕らわれ、剣で殺されるべき者は剣で殺される」とあります。ここの「～べき者は」という表現は、その背後に神のご計画、神の定めがあることを暗示します。神を信じる者になれば苦しいことはなくなるとは聖書は約束しません。むしろイエス様の足跡に従う者として、イエス様と同様この世から苦しみを受け、この世のいのちを失うこともあり得ると言われています。それもクリスチャンの召しの一部であると。

それゆえ 10 節最後に 4 つ目のこととして「ここに、聖徒たちの忍耐と信仰が必要である」と言われています。もし私たちがキリスト教について誤った認識を持っていて、神を信じていれば良いことばかりが起きると考えているなら、迫害や殉教の危険が迫った時、その人は簡単に信仰を捨てるでしょう。しかしそこでこそ私たちの忍耐と信仰は試されるのです。聖書は決して神を信じていれば、この世のいのちも守れるとは教えていません。あるいは危険な時は信仰を否定したり引っ込めても良いとは言いません。たとえ命が奪われるかもしれない危機的状況でも堅く信仰を保って耐え忍ぶ歩みが私たちに求められています。その結果、殉教するかもしれません。しかしそうしてこそ勝利があると 12 章 11 節で言われていました。私たちがいのちの書に名の記されている神の民なら、最後までそのように信仰を保つ生き方を神が導いて下さるはずです。

先に「42 か月の間」という表現で見ましたように、これはこの黙示録が書かれた 1 世紀だけの話ではなく、主の再臨の日までの全期間に関わる話です。ローマ帝国に限らず、歴史の中では繰り返し国家権力・この世の為政者が、自らへの絶対服従・無条件の服従を要求し、従わない者たちを迫害しました。日本においても戦時中、国家権力が天皇を神格化し、神社参拝を強要し、従わない者を非国民とし、村八分へ追い込んだのも、今日見た竜と獣の現れと言えます。私たちはこの世の王や為政者のために

祈り・とりなし・感謝し、また敬い・尊び・従うようにと言われていますが、この本来は「良いもの」を、悪魔はいつでも「悪いもの」に変えて、自分の手下として用い得る！ということを私たちはいつも注意していなければなりません。そうならないように私たちは祈るべきですし、みことばに反しない限り、神が立てた制度として最大限従うべきですが、世の終わりまでサタンは繰り返し国家権力をこのように用いると御言葉で言われていることも私たちは一方でしっかり心に留めていなければならないと思います。そしてそのような状況が訪れても、私たちは今日の章で言われた次のことをしっかり心に刻んで戦う者でありたい。第一にどんな状況に至っても神がすべての上におられる主権者であること。第二に子羊のいのちの書に名が記されている人は決して獣を拝まないように守られること。第三に、その守りがあってもこの世にあっては殉教はあり得ること。従って第四に必要なのは聖徒たちの忍耐と信仰であること。そのための力を下さる神を見上げて、神の力により、最後まで信仰に堅く立つ歩みへ導かれたいと思います。そしてその歩みをもって、いのちの書に名が記されている者であることを現し、証のことばによって勝利し、ついには栄光に入る者とされる栄えある神の民の歩みへ導かれて行きたいと思います。